
サクと乗車駅

策士 溺愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクと乗車駅

【Nコード】

N5255BA

【作者名】

策士 溺愛

【あらすじ】

サクとナギという登場人物が、一つの村を訪れたときのなし。
そこは”100”人の村だった。
サクは何を感じ、何を思うのか。
ナギは何を思い、何を感じ取るのか。
二人の記憶の1ページ。

大粒の八重桜の花びらが清涼感のある生暖かい風に、まるで波乗りをしているかのように宙を舞い、
辺り一面はピンク色と濃淡様々な緑黄色のグラデーション、
その色彩の中に合掌造りの集落がバランスよく整列している。
そこは理想とは違い想像通りの風光明媚な落村だった。

田舎の駅は、大抵無人であるがやはりここもそうだった。
犬の小屋を、でかくしたような簡素な造りを抜けると、すぐホーム
に行き着いた。

ホームは10メートルくらいで、アイスクリームと書いてありそう
な青色が少し剥げたベンチが置いてあった。
目の前には向いのホームはない。当然線路も1レールだけで、他に
利用者はいなかった。

「この村はどうだった？ 考え深かったと思うけど」

その声は男声とも女声とも違う不純物の無く、透き通った水晶から
うまれるような清涼な声であった。

また、客観的、永世中立的な声でもあった。

「うーん、桜ってさ人間みたいだね。そう思った」

少年より少年らしいその声はそっけなかった。

サラサラと肩くらいまである烏羽色の髪を揺らし、そこから対照的に白い肌を覗かせ一匹の動物らしい物体を見つめている。

白い肌は、どこまでも華奢な身体と、どこまでも精悍な顔を優しく包んでいた。

「それだけ？それに村の感想じゃないじゃない」

少し呆れた様子で動物らしい物体はぼやいた。

どうやらあのすばらしい声は、この動物らしい物体から発せられているらしい。

「ナギってさ猫みたいなのに全然クールじゃないよね。そんなにぼくにかまって欲しいの？」

「それもう三回くらい答えたよ。答えは、いいえ結構ですだよ。サクの変化について記録するのがわたしの使命だから。それにサクが決めたことじゃないか」

「そうだよ。その方が楽しいかなって思ったから。それに猫って可愛いしさ」

サクという人物と、ナギという見た目が猫の会話を一段落させるように蒸気機関車がやってきた。

モクモクと黒い煙を上げ、車輪とレールの金属音と共に無骨な黒い塊は二人の前で止った。

そして汽車の中から車掌らしき人物が降りてきた。

「いやーこんな駅に止まるのはほんと久々だなー。10年いや20年ぶりかな」

車掌は万歳のようなポーズをし身体を伸ばしていた。

「あー。これパスポート」

サクはそう言いながら、自分の顔写真がついたパスポートを車掌に差し出した。

「おーすまんすまん」

車掌は差し出されたパスポートを、確認し虚偽がないかチェックし始めた。

この人の癖なのか良く目にする声出し確認をしていた。

「えーと、名前と年齢と有効期限と、あと写真か」

そう独り言のようにつぶやくと車掌の目が止まった。
なにか不思議な、信じがたいものを見るように。

「この写真ほんとに君かい？」

目を丸くして写真とサクの顔を交互に見つめながら車掌は言った。

「そうですけど、なにか問題でも？」

サクは相変わらずそっけなく答えた。

「あーいや、写真の虚偽とかって言うわけじゃないんだよ。長年写真を確認してきたけど、こんなに写真映える人見たことなかったからね」

「はー」

サクは少し戸惑った様子だった。

「写真映えって言葉はちょっと失礼だったかな。元々美人さんだけどこの写真の君は生き生きしてるというか。見てるこっちが元気になっってくるような、そういうことだよ」

「はー」

サクは少し困った様子だった。

「あーっ長話して悪かったね。さー乗って乗って」

そう謝るように車掌に言われるとそそくさとサクは汽車に乗り込んだ。

汽車の中は外装の無骨な造形ひっくり返したような様式で、内装は白と黒の市松模様をベースとし多彩な装飾が施されていた。

照明は小型のシャンデリアが使われていて、光源を乱反射させ魅力的に見せるためガラスが複雑に配置されているタイプであった。

座席の配置は普通のボックス席タイプであったが、乗客への衝撃を和らげるクッションはブラッドレッドのヴェルヴェット生地が使用されており、プードルの毛のようにフカフカしていた。

ナギはクッションの上に飛び乗り座ると、ションションした様子でサクに話しかけた。

「うわー。すごい豪華な内装だね。きつと前の村でのご褒美だね」

「確かに不自然なくらい豪華だよ。窓にも赤いカーテンが着いているし装飾一つ一つが細かく造られてる」

「でも私の趣味ではないな。剣とか骸骨とか、なんかオカルトっぽい」

「そういうわけじゃないよ。こういうゴシックみたいなデザインって宗教的な影響が強いんだよ」

サクの表情は、心なしに緩んでいるようだった。それをからかうようにナギは切り出した。

「サクって本当はよくしゃべるんだねー。さっきの車掌さんみたい」

「ナギが話しかけたからじゃないか。これでもぼくは道を尋ねられたら、それこそ丁寧に説明してあげる質なんだよ」

「本当に？さっき美人さんだねなんて言われて困ってたじゃないか。あつもしかして照れてたの？」

ナギの上顎と立派なヒゲは上向きにカールしていた。サクはムスツとしたように顔を横に反らした。

「ぼくの中の車掌さんのイメージと違っててびっくりしてただけだよ。普通はもっとクールだと思ってたから」

「ふーん。わたしもサクはもっとクールだと思ってたけどね」

「もーいい。疲れたから少し寝る」

サクは普段通りそっけなくそう言つと、横になつて小さな寝息を立て始めた。

それを見つめるナギの顔は少し嬉しそうに見えた。

その後ナギも丸くなり小さな寝息を立て始めた。

二人を乗せたまま汽車はせつせと走り続けた。黒い煙をモクモクと上げながら、いくつものトンネルを超え、樹海を超えた。

それを何度か繰り返しているとだいぶ開けた場所に出た。

そこには人の臍当たりの背丈の雑草がイモ洗い状態になった畑だったらしい敷地や、廃屋にたった木造建築の家屋がそこらじゅうに放置されていた。

そこは一言で言えば廃村であつた。

「サク起きて」

ナギは爪を立てないようにピンク色の肉球をサクのほっぺにちょこんと乗せた。

すると、サクは薄目を開けてなにかつぶやいた。

「お腹空いた・・・」

「もうすぐ次の駅に着くみたいだから降りる準備して。そこで食事しようよ」

サクはしょうがなさそうに、掛けていた上着を羽織り、脱いでいた編み上げのブーツを履いた。

ナギは窓ガラスに映る自分を確認しながら顔の毛波を整えたり、首につけている白いリボンに汚れがないか入念にチェックしている。その様子を見たサクは、

「猫なのに洋服着てるのって変わってるよね。それもタキシートって」

「濁点が抜けてるよ。猫だって旅行する時くらい身だしなみを気にするんだよ。サクは人間なのにお洒落って言葉を知らないのかい？」

「ぼくのどこがお洒落じゃないんだい？」

「まずなんで着物と袴？次になんでその上から黒いコート羽織ってるの？」

「分ってないのはナギのほうだね。着物と袴って衣類はすごい歴史のあるものなんだよ。文化だよ文化」

「それは知ってるけどその場その場に合わせた衣類を着用するのもお洒落の内なんだよ。サクは何かの式に出席でもするのかい？」

サクはナギの顔を見て目を細めた。

ナギは一瞬でサクの言わんとすることが分かった。それくらい得意げな表情だった。

「ぼくの着ているのは礼服じゃないんだよ。上は浴衣って言われてる和服だし袴は武道袴だし」

「はー。でもその上からトレンチコートじゃね」

「和と洋の融・・・」

キキーツ。

二人の会話を遮るように汽車のブレーキによる甲高い金属音が鳴った。

「着いたようだね。さあ降りよう」

ナギは座席から飛び降りるとテコテコと出口に向かった。

「サクー。はやくー」

サクはそう急かされると早足で出口まで行った。

「いいあだ名だね」

最後までおしゃべりな車掌だった。

二人はホームに降りると辺り一面を見まわした。

駅とホームは、前のと左程変わらず言葉を選ばなければ錆びれているという印象だった。

向いのホームも無く当然無人駅で、他に乗客もいなかった。

「エクソアだって。この駅の名前かな」

サクはナギに質問した。

ナギはホームにたっている看板を目を凝らして見てみた。

「良く見るとつつすら横に駆って書いてあるね」

「どつという意味なんだろ」

「さあ。町に行けば分かるかもね」

二人は駅を出て駅前広場に出た。駅前広場には秤を見つめている老若男女の像が、噴水の真ん中に水しぶきを浴びながら立っていた。広場から見える景色は、錆びれた駅とは打って変わって活気溢れる商店街であった。

いかにもここから商店街です、というようなブフルラボンス通りと書かれたアーチ状のゲートがあった。

通りには軒並み店が営業していて、それに見合う消費者でこった返していた。

「すごい人だね。どこかの闇市場みたいだよ」

あつけにとられながら二人は、通りを進んでいくと一軒のレストランがあった。

外見はいかにも洋風といった、食事というよりランチといった店だった。

「そつえばお腹空いてた」

サクは、そう言うつと吸い込まれるようにレストランの中に消えていった。

それを追いかけてナギも消えていった。

「いきなり店に入っついていかないでよ」

「ナギもお腹空いてるでしょ？それにきみが好きそうな洋風なレストランじゃないか」

「まー遠からず近からずってとこだけでも」

二人が問答していると店員がやってきた。

「いらっしやいませ。二名様でいらっしやいますか？」

サクはうなずいた。

「かしこまりました。お席へご案内いたします」

二人は言われるがまま案内された席に座った。

そして、サクは肉料理を注文しナギは魚料理を注文した。

空腹だったためか二人はあつという間に完食してしまった。

食後のコーヒーも飲み干して会計を済まし店を出た。

「おいしかったね」

ナギは満足そうにサクに話しかけた。

「そうだね。こんなにおいしい料理食べたの久々かも。それに内装もちよっと変わってた」

「うん。なんか教会を改装したような造りだったね」

「本当の教会だったりしてね」

レストランの感想を言いながら歩いていると、小さなショーウィンドウの前でサクは足を止めた。
そこはアクセサリー専門店だった。

店の看板には、ブラックレター書体でROYAL EVOLUS
IONと彫刻がしてあった。

サクはショーウィンドウに飾られている、星型に宝石の埋まったピ
ンクゴールドのシルバーに、細かい造形の王冠がかぶさっているア
クセサリーを見つめていた。

「サクってアクセサリーなんてものに興味あったの？」

ナギは皮肉混じりに言った。

「ううん。興味無かったけどこの店のアクセサリーには興味がそそ
られる」

「ふーん、それはそれは」

サクは、また吸い込まれるように店の中に消えていった。
それを追いかけてナギも吸い込まれるように消えていった。

店の中には、リングやネックレス、宝石の類が犇めき合っていた。
壁にはどうやら何かの賞を取ったであろう賞状が数多く飾られてい
た。

しかし客はいなかった。

「あの」

サクは、椅子に腰を掛けていた職人兼店員らしい年配の人物に話し
かけた。

その人物はサクの顔を見ながら、

「なにかお気に召したものは？」

「あっはい。ショーウィンドウに飾ってあった王冠と星の」

「あー。あれね。あれはねうちの今の商品の中で一番古いデザインなんだよ。うちが昔の王室にアクセサリーを提供してたときからあるんだよ」

「そうなんですか」

「でも今の風潮には合わないデザインなのかね。全く人気がないんだよ。あれの良さが分かる人にまた会えてわしは嬉しいよ」

老人はニンマリ笑うと重い腰を上げショウウィンドウに向かった。老人は三つのカギを外すと、サクのお目当てのアクセサリーを取り出してサクに手渡した。

「これは君に差し上げるよ」

「えっいや。でも」

「いいんだよ。少し年寄りの世間話を聞いてくれるかい？」

サクは少し考えた後、

「はい。聞かせてください」

老人はまたニンマリした。

「この店も今の通り客足はパツタリでね。でもわしの若い頃はともハンドメイドを続けられないくらい流行っていたんだよ」

「今も素敵だと思います」

「ありがとう。もともとは王室ご用達の名店でね、ほら壁に掛ってるだろ？」

「たくさん賞を取られたんですね。王室とは？」

「あー。この町はね昔は国家だったんだよ。もちろん王政のね。よくある話だろ？王政の国なんてそう上手くいかない、ここもそうだったんだよ」

「そうだったんですか。でもどうして町に？」

「王政が終わりを告げた時に、これからの国の方針を国民全員で話し合ったんだ。すると一つの案が出てきたんだよ。

国みたいに大勢の人がいるから統治する人が必要になる。なら規模を小さくして一つの町なり村にすれば一人一人の意見が尊重され、足並みも揃えられるんじゃないかってね。
これもよくある話さ」

老人はサラリとした口調だった。

「ふむ、それでどうなったんですか？」

「いくらかの会議の後、この案を推進することに決定されたんだよ。それで国家ではなく町にして、その住民は”100”人にするとういうことに決まったんだよ。」

「100人ですか．．？」

「みんなから信用されていた、ある優秀な学者達が一番効率がいい人数を求めた結果”100”人だったんだ。

もちろん次の論点はどう”100”人を決めるか、それと溢れた住民についてだった。

なに簡単な話だよ。選民思想というのを知っているかい？」

「はい、一応」

「この土地には主に、ベイル民族とスピング民族という人種と他の少数の人種がいたんだ。

当時は一般的に、ベイト民族の方が優れている人種とされていてね。その中から”100”人を選ぶことになったんだよ。

しかし、まあ、当然反対の声が多くてね。その解決策が、両民族の中で優秀な人材が能力測定試験をつくって、能力の差を露呈させて選民することになったんだよ。

実際試験をやってみると、予想されていたような能力差は無かったんだがね。

”100”位以内に入れなかった人は、この土地を追い出されたり逆らった人は殺された。

当然その選ばれた人の中には、優秀な元軍部の人もいたし優秀な科学者もいたからね」

「ではおじいさんも優秀だったんですね」

「はっはっは。やはり初期の選民は平等じゃなくてね。選ばれた人は、大半が王政の頃の上層部の人だね」

その後、老人は壁に飾ってある賞状に目をやった。

「しかし時がたつにつれて、町の外から優秀な人が入ってきて今は王政の頃の人間はわしだけになったよ。

能力試験も何度も何度も改正されて、その度により高度な能力が必要になったんだよ。

わしも死ぬ気で頑張ったがね．．．今のわしは”100”位なんだよ。寄る歳には勝てんよ。

次の選民査定が来たら確実にわしはもうだめだよ。この店も閉めなきゃいけないよ。

君が最後のお客さん．．．もらってくれかね」

老人の表情は、アクセサリーのようなだった。

「は．．．はい、それなら」

老人はまたニンマリ笑ってみせた。

ナギと店を出たサクの胸には星と王冠が眩く輝いていた。

ピンポンパンピンポン。

効果音の後にアナウンスが入った。

「本日午後五時より選民査定を行います。住民のみなさんは駅前広場にお集りください。なお見学なさる方は迅速な査定を行うためご協力をお願いします」

アナウンスは三回繰り返し返された後、同じ効果音がなりプチッと回線が切れた音がした。

「サク、見学していいみたいだよ」

「みたいだね」

二人は駅前広場に行くと、広場を囲むように即席の柵が設置されていた。

どうやらその外側は見学者で、内側は住民のようだった。

広場の内側には、机と椅子が置いてあり住民が席に着席していた。

「あれ？」

サクは不思議そうにそう言った。

「今日の査定人数は101人って書いてあるよ」

それを聞いていた見学者の一人が得意げに話しかけてきた。

「この町の住人になりたいという人が申請してきたら能力試験をやるんだよ。今日は101人だけ多い時は150人以上の時もあるんだよ。」

今日は誰が脱落するんだろうね」

見学者は楽しそうだった。

「あっ」

ナギはなにかを見つけた。

「さっきのおじいさんがいるよ」

「本当だ」

「サクとしてはおじいさんに残ってもらいたいのかな？」

「なんでだい？」

「形見を押しつけられたみたいで嫌じゃないかい？」

サクの返答を待たずしてアナウンスが入った。

「これより選民査定を行いますので見学者のみなさんはお静かにお願いします」

広場はシーンと静寂に包まれた。

住民の一人一人が、机に置かれたヘルメットのようなものをかぶりはじめた。

そのヘルメットにはケーブルらしいものが出ており、101本のケーブルは一つの機械に繋がっていた。

十分程の静寂の後、住民は一斉にヘルメットを外し、足早に噴水前に置いてある電光掲示板の前に集まった。

掲示板には測定中の文字が三度点滅した後、順位と名前が表示された。

住民と見学者は、皆掲示板の文字に釘付けになった。

「見ても分からないよね」

「そうだね」

またアナウンスが入った。

「今回の査定で”100”位以内に入れなかったのは、前”100”位のジャスティン・ハーツ氏です。

大変喜ばしい事を祝しまして、ただいまより前年通り住民による簡単な祝賀会を催します。

このまま見学することもできますので、お時間がある方は是非存分にわが町を見学していただければ幸いです」

ほとんどの見学者は引き続き見学をするようだった。

「わたし達も見学する?」

「うん。あのおじいさんはこれからどうするのかな」

「サクあれ見て」

ナギが視線を送った先には、アクセサリー屋のおじいさんが壇上に立っていた。

「わしは、王政の頃からこの国を見てきましたし共につくってきました。

そしてこのすばらしい選民査定という制度を生み出し、より高貴なものにと努力してきました。

まさにこの町の住民は、他の土地の大国にも勝るとも劣らない全知全能でありながらも、人格者集団となりました。

残念ながら今回わしは、適合者には成り得ませんでした可悲観はしていません。

わしは先人に、わし達がつくった町はすばらしいと、清く正しい町作りだったと伝えます。

みなさんもわが町を誇りに思い、精進していくことを忘れますまいよう、いつも見守っているかどうかこの町をよろしくお願い申し

上げます」

おじいさんの演説にも似た、熱い主張が終わると住民が歓声を上げた。

それに続いて大半の見学者も歓声を上げた。

その後、おじいさんは商店街の通りに数人に引連られて消えていった。

住人と、見学者は熱が冷めきらなくしばらく談笑などをしていた。

しばらくすると、商店街通りからおじいさんと消えていった人達が戻ってきた。

カラカラとなにやら配膳車らしい物を引いていたが、そこにおじいさんの姿はなかった。

住人が査定の際座っていた椅子に着席すると、配膳車から肉料理のようなものが住人全員に配膳されていた。

住人は箸を取ると皆一斉に、そして同時に一切れの肉を口に運んだ。その食事のような光景を、見学者達は目を丸くして見ていた。目に焼き付けるように。

しばらくすると見学者は帰っていき、住民達も机や椅子等をそくさく片付けた後、商店街通りに一斉に消えていった。

二、三分後には、広場にいるのはサクとナギだけになっていた。

「ねーナギ。おじいさんってさ・・・」

「だろーね。わたし一応猫だからね」

ナギは、自慢げにフンと鼻を鳴らしてみせた。

「・・・。あつ」

サクは何か思い出したように声をあげた。
するとナギは、

「大丈夫だよ。牛肉だった」

「はー・・・よかった」

サクは安堵の言葉を漏らすと、おもむろに胸にかかったネックレスをまじまじと見出した。

ネックレスの王冠の裏には、
” 100 ” という数字が刻印されていた。

「ナギ？なんか書いてある」

「うーん、ロットナンバーじゃない？」

「あー、じゃあ” 100 ” 番目ってことだね」

二人は駅の方に体を向けた。

「行こうか」

「そうだね」

二人は駅に向かって歩き出した。

「あっそうそう。この村の感想は？」

「うーん、このネックレスの宝石ってなんて言うのかな？」

「サクってば、また質問の意図とズレてないかい」

ナギはいつものように少し呆れた様子だった。
そしてサクの胸元に目をやった。

「えーと、トルマリンじゃないかな」

「トルマリン？」

「希少価値はそんなに高くないけど、石言葉は希望だったかな」

「へー。希望かー。確かに、少年からイメージを取り出して蒸留したような藍色をしているね」

サクはいつも通りそっけなくそう答えた。

二人を見送るような旋律で、

” 100 ” 人と ” 友達 ” から連想される歌

どこからか楽しそうな子供の声が寂しく寂しく響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255ba/>

サクと乗車駅

2012年1月14日16時52分発行